

「声かけは愛情」

創世記4章1～16節

柿島文人

1節。エバが“私は、主によって一人の男子を得た”と言っています。これは“私は獲得した”という言葉遣いです。自分が成し得たという感覚です。確かに、出産は命がけなので子を産んだというのは大変なことです。しかし、根本に立ち返って考えてみれば、全てが神さまのあわれみによって成し得た再出発だったはずです。人が何かを成し得るような要素は何一つなかったはずなのです。それなのに、もう自分の手柄を、自分の力を誇っています。そして、その感情を子どもの名前にしてしまいました。“カイン”とは“私は獲得した”という意味です。エバが創世記3章15節の原福音に寄与したという自負と、エバの誇らしげな思いが伝わってきます。

2節。エバに二人目の男の子が生まれました。名前は“アベル”、この意味は儚い、水蒸気という意味があります。兄カインは農夫、弟アベルは羊飼いになりました。父アダムの職業は土を耕す者でしたから、稼業を継いだのはカインでした。いかにカインが長男として両親の期待を受けて生まれ、育てられたかが分かります。

3～5節。献げものを献げるというのは礼拝そのものです。礼拝を終えたカインとアベルは喜びに溢れるはずでした。しかし、カインは神さまに顔を向けられませんでした。二人の献げものに、どんな違いがあったのでしょうか。聖書は、どちらに対しても良いとも悪いとも言われていません。ただ、違うのは姿勢です。カインは決まり通り持ってきましたが、アベルは自分自身で、一番良いものを神さまに、と持ってきました。それでも物としては神さまは良いとも悪いとも言われないうのです。つまり、神さまが見ているのは人の心、神さまへの思いです。まず、神さまはアベルを喜ばれました。それでアベルの献げものも喜ばれたのです。反対にカインには、悲しみを覚えられ、それでカインの献げものも喜んで受けることが出来なかったのです。

なぜ、カインは顔を上げられなかったのでしょうか。それは怒っていたからです。弟アベルの満足気な姿にがまん出来ず、妬ましく思う心しか生まれませんでした。これこそ罪がもたらす悲惨さです。その根底にあるのが自己中心です。

しかし、神さまと共にいる者、神さまに従う者は自己中心ではなく、神さま中心です。神さまを信じて生きるなら、相対的世界観ではなく絶対的世界観に移行し始めます。自分の現状と比べて周りの誰のことが、どう見えたとしても、その比較が神さまの愛という真理を上回ることはないのです。それが絶対的世界観です。誰とも比較しないアベルのように、私に目を注いでくださる神さまを確信することが、その神さまと共にいることなのです。とは言え、私たちは自分が相対

的価値観で生きていることを意識しながら、それでも聖書から教えられる絶対的価値観という視点を忘れず、唯一の絶対者である神さまを信じて生きることしかできません。それでようやく、自分にも、他の人にも優しくなれるのです。

6,7節。ここには神さまの姿が明確に記されています。それは“神さまは見ておられる”ということです。カインは自分に神さまの目が留まらなかったことに対して怒り、憤りました。しかし、この“目を留め(4,5)”ということは、気に入るとか、受け入れられるという意味ではありません。これは実に神さまの視線、ということです。そのように視線を感じるか否かは、ある意味では個人的、主観的なものなのです。カインがどう思おうと、神さまの方では目を留めておられたのです。6,7節の神さまの言葉はカインを見つめていたからこそ、カインに目を向けられていたからこそその言葉です。苦い経験は神さまではなく、自分にとっての比較の相手を意識し過ぎている時に、概して経験するのではないのでしょうか。カインとアベルの献げものを比べれば、人の目で見れば、殆ど差はなかったでしょう。カインもアベルのように神さまを意識し、自らの信仰によって献げれば良かったのです。ですから、新約聖書も二人のこの感じ方の違いを「信仰によって(ヘブル1章4節)」と一言だけで言い表しています。

カインとアベルの二人ともに神さまの視線は注がれていました。神さまは二人ともに視線を注ぎ、愛を余すことなく注いでおられていたのです。

8～16節。ここには有名な“弟殺し”が記録されています。カインが弟アベルを野に誘い出したのは怒りのピークというタイミングです。そのような時に平和的解決は期待できません。数年前は、よく“アンガーマネージメント”という言葉が取り上げられていました。カインは自分の怒りを管理できず、最悪の結末を招き寄せました。

でも、そこから神さまからの語りかけとカインとの会話が続きます。ここには神さまの大きな悲しみがありません。最愛のアベルを失い、今また、最愛のカインを失おうとしているからです。10～12節で主ご自身がアベルの血の復讐者になると言われていました。それが今、15節で主ご自身がカインの血の復讐者になると約束してくださっているのです。つまり、カインにとっての一番の近親者は神さまご自身であるということです。ここには、このカインのような状態であっても神さまは人を愛し、いつくしんでくださる方だと示されているのです。カインに対する声かけは、まさに神さまがカインを愛しているからです。私たちがたとえカインの末裔であっても、いつでも全く新しいのちに生きられるように恵みが与えられるのです。その恵みは、悔い改めて、神さまの御前に立ち返るだけで与えられる愛情たっぷりの恵みです。